

宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第41話

サダト大統領の暗殺 エジプト

ヨーロッパから帰国の途中マグレブ諸国を經由して文明発祥の地エジプトに降り立った。砂浜と言えば房州の九十九里浜しか見たことが無く、ピラミッドがそそり立つエジプトの果てしない砂山に感激し、これが砂漠かとしばし見入った。



砂漠に湧いたように建つ階段式ピラミッド

今を去ること70年前、エジプトは革命によって歴史的に大きな変化を遂げた。1952年エジプト国王であるファルーク1世が退位し王政が終焉したのである。翌年の1953年エジプトは共和制に移行した。革命の主導者は将軍の

地位にあったナギーブと若手将校のナセル中佐

である。ナギーブは大統領にナセルは首相に就任するが、ナセルはナギーブを追い落とし第2代大統領となる。

ナセルはアラブ民族運動の輝ける星としてアラブ世界から注目された。新大統領はアスワンハイダムの建設やスエズ運河の国有化を成し遂げるなど絶大な権力を握り改革を果敢に断行していく。

革命を支えたサダトは新政権の国务大臣として入閣し、さらに人民議会議長を務め、次いで副大統領に就任した。ナセルは1970年心臓の病に襲われ急死し、副大統領の地位にあったサダトが後を引き継ぎ新大統領となった。

ムハンマド・アンワル・アッサーダート（1918年12月5日～1981年10月6日）は日本ではサダトと呼びならわしている。エジプトの軍人、政治家、第3代エジプト大統領である。

サダトは国名をアラブ連合共和国からエジプト・アラブ共和国に改め、また第4次中東戦争ではイスラエルに大打撃を与え国民から絶大な支持を得る。

外交ではナセルのソ連寄りから大きく方向転換し親米へと舵を切った。そして1977年アメリカのカーター大統領の仲介で敵対するイスラエルと平和条約を結び、それが高く評価されサダトは1978年ノーベル平和賞を受賞した。だがエジプトのイスラエルへの接近は、他のアラブ諸国からパレスチナ人に対する裏切り行為と受け止められ手痛い反発をくらう。

1972年イランではホメイニー師がイラン革命を起こし、権勢を誇ったパーレビー国王が亡命した。サダト大統領はパーレビーをエジプトに迎え入れるが、民衆はじめ周辺国の反発は大きかった。



カイロ市内上空のヘリコプター

砂漠の砂は音を吸い込んでしまうのだろうか、ラクダに揺られて歩いても周りはシンと静まり返り、時折ラクダ引きの甲高い声が聞こえるほか何も音がしない。そんなことを考えていたらいきなりゴーっと凄まじい音が空から降ってきた。見上げるとジェット機の編隊が放つ轟音である。悠久の静寂の中でなんと無粋な、と思わず舌打ちしたくなる耳障りな騒音であった。

首都カイロ市内は車の警笛がひっきり

なしに鳴りわめき、そこへ人々の大声が入り交じり喧噪のるつぼである。その上時折ジェット機やヘリコプターの編隊が轟音をとどろかせていく、まったく古都にそぐわない騒音である。

帰国のため空港へタクシーで向かった。カイロ市内を離れてしばらく土漠を走ると道路の片側に黒いイスがずらりと並べられ長々と続いている。天幕が張られ、ミサイルであろうか空に向けて無造作に置いてある。多くの作業員が立ち働いているところを見ると、何か大きなイベントでも催すのであろうか、ジェット機の轟音とも関係があるのだろうかなどと横目で見ながらそこを通りすぎた。エジプトを飛び立ち翌日成田空港に1カ月ぶりに帰ってきた。飛行機に乗ると一睡もできないのでタクシーの中でいつの間にか寝入ってしまいドライバーに起こされ目を覚ますとわが家の前であった。

ただいまの挨拶もそこそこにまずは白い飯と味噌汁を所望し、無意識にテレビのスイッチを入れた。すると画面いっぱいにエジプトのサダト大統領暗殺という字幕が目に飛び込んできて絶句した。1981年10月6日、エジプトは第4次中東戦争開戦日にあわせ勝利を祝う戦勝記念パレードを催し、そこに大統領が列席していたのであるが、その時イスラム過激派の兵に銃撃され落命したのである。あの土漠に並んでいたイスはパレード観覧のための準備だったのかと、ようやく事態が飲み込めた。

図らずも大統領が暗殺された現場を、昨日通り過ぎてきたことが一瞬フラッシュバックし呆然となる。目の前の白い飯がゆげをたてている。テレビの前にくぎ付けとなっている姿を家内が見て、冷めないうちに早く召し上がれと声をかけられ我に返った。

サダト大統領の暗殺により副大統領のムバラクが第4代大統領に就任した。ムバラクはそれから30年に及ぶ長期政権を担ってきたが、2010年12月チュニジアに端を発しアラブ諸国に吹き荒れた所謂「アラブの春」によって失脚した。